

口頭表現力向上を目指したマルチカードによる英語応答練習

English Interaction Practice with Multi-card for Improving Oral Communication Skills

早稲田大学 法学部 教授 原田 康也 (harada@waseda.jp)

1. はじめに

筆者は英語教育の本質は英語運用力の向上にあるという立場から早稲田大学法学部における授業実践を進めて来たが、授業の実際的な効果を（肯定的にせよ否定的にせよ）定量的に裏付ける客観的指標を得ることが従来は困難であった。しかし、音声認識技術を活用し、電話での受験を通して英語のリスニング・スピーキングの技能を測定するPhonePass SET-10¹を採用することで、授業内容の客観的な見直しが可能となった。本発表では、その概略と具体的な対策の一部について報告する。

2. 法学部におけるこれまでの授業実践（総合英語）

法学部では、1年生は1コマ必修自動登録、もう1コマ選択自動登録（総合・講読・表現演習などの種別を選択するが、クラスは選択できない）、2年生は2コマ選択必修（自由にクラスを選択できる）、3・4年生は選択科目として要卒単位に算入される英語科目を受講できるほか、学年に関わらず選択できる要卒単位外の自由科目としても英語科目が設置されている。

帰国生も含めた各種学生が混在する1年生必修の総合英語²においては、英語の聴解力の向上を中心的な目標として授業を設計している。英語によるニュース放送を5分程度録画したビデオクリップを素材として、メモをとりながら数回視聴し、途中で他の教材による基礎練習を交え、授業の最後30分では、ニュースの話題を一つ、およそ30秒から60秒程度の内容を英語のまま書き起こすという作業を中心として授業を進めてきた。

3. PhonePass SET-10の実施と結果

2000年度から2002年度までの3年間の経験をまとめると、SET-10を受験した法学部生のスコアについて、概略以下のような傾向が見られる。³

- i) 2.0から8.0の総合スコアのうち、3.5を下回るのは小数（1割前後以下）、4.5を上回るのは2割前後程度。
- ii) 5.5を上回るものは、比較的（2、3年を上回る）長い英語圏の生活経験を持つ場合が多い。
- iii) 学生ごとのスコアは、1回目と2回目では0.2前後の向上を示す場合が多いが、そのあとはおおよそ安定している。

4. 2002年度における授業内容の手直し

今後の集計と大規模な追実験が必要な段階であるが、学習活動のデザインについて重要

¹ 参考文献[1]・[2]のほか、<http://www.ordinate.com>を参照されたい。

² 2000年度を受講生のTOIEC公開試験スコアは200点台の後半から900点前後にまで分布していた。

³ 2002年までは総合点は最低2.0点から最高8.0点まで、小数点以下1桁目までの2桁で表示され、測定標準誤差は0.2と報告されている。2002年の冬から試験の内容の一部とスコア表示が変更され、スコアは20点から80点までの二桁で表示されることとなった。

な示唆が得られている。受験対策などの影響も含めて英語はそれなりに勉強してきたが、リスニングの訓練を全くしてこなかった学生を中心的な対象として想定して学習活動を構成していたつもりであったのに、そうした学生には大幅なスコアの上昇は見られず、一部の帰国生に際立った向上が見られたことが大きな反省材料となった。

1990年代半ば過ぎより教材として CNN Headline News を使用しているが、英語のレベル・アナウンサーのスピード・内容的になじみにくい点など、学生から不満の声が聞こえていた。また、1998年度までは大学初年度生が身につけるべき基本的な語彙習得に向けての訓練を行っていたが、1998年度後期から基本語彙習得のための訓練がおろそかになりつつあることをこの数年自覚し始めたところでもあった。PhonePass そのものについては、受講生のアンケート結果や授業中の反応から総合的に判断すると、英語の質問にすぐに英語で応答しなければならないことが「難しさ」につながっているように見受けられた。特に、最後の自由応答設問については、日本語でも答えられないという意見が特徴的に見られた。

こうした点に対応するため 2002 年度の後期にマルチカードを利用した応答練習を行った。SET-10 の最後の問題である open question の内容に相当する質問を多数用意し、名刺サイズのカードに印刷して、3 人ずつのグループにわかれた学生に配布した。各グループの学生は交代で質問者・回答者・タイムキーパーとなり、質問者がカードに印刷された質問を 2 回読み上げた後 8 秒待ってから回答者が答えはじめ、その時点から 30 秒後に回答終了とし、質問者とタイムキーパーが回答に対する評価を記録シートに記入するという形式で練習を行った。応答の話題としては、SET-10 の課題におおよそ相当する類似問題のほか、入門的な自己紹介の話題、早稲田大学の日常生活に密着した話題、TOEFL CBT の writing topics をそのままカード化したものも使用した。

5. 考察

マルチカードを利用した応答練習を行うことで、テキストの音読がコミュニケーションの基礎訓練として重要であるという英語教育の基本的認識の再確認ができたほか(1)質問者だけがカードを見て、応答者・タイムキーパーはカードを見ることのできないため、情報落差が自然に成立する(2)質問者・タイムキーパーも評価のため回答の聞き取りに集中する必要がある(3)カードによる応答練習においては、質問者は音読だけを担当するため一般的なペア学習に比べて負荷が低くなり、より活発な応答になる(4)カードを用いたゲーム的な課題であるため、応答までの制限時間など、現実的な対話状況に近い応答訓練が可能となるなど、今後の英語学習活動のデザインに向けて、さまざまな興味深い点が明らかとなった。

6. 参考文献

[1] Bernstein, Jared and Harada, Yasunari, "Automatic Measurement of Spoken English Skills: consistent benchmarks for English learning," 大学英語教育学会第 41 回全国大会, 41th Annual Convention of the Japan Association of College English Teachers, 2002 年 9 月 8 日.

[2] 原田康也, 「電話を利用した英語リスニング・スピーキング自動テスト: 早稲田大学法学部 1 年生のスコアからの考察」, 信学技法 TL2002-41 (2002-12), pp49-54, 電子情報通信学会, 2002 年 12 月 6 日.